

## アンコール時代と ポスト・アンコール時代の間隙 ——碑文と年代記の隙間を見きわめる——

北 川 香 子

は じ め に

アンコール時代とポスト・アンコール時代のあいだには、14世紀前半から16世紀半ばまでの約2世紀にわたって、同時代史料が見つからない空白期がある。そのためアンコールからの王都の移動がいつ頃どのようにして起こったのかを、確実な史料の裏付けをもって語ることはできない。現在の通説は、植民地期にフランス東洋学者たちによって作り上げられた物語がもとになっている。物語の素材となったのは、空白期前後の碑文、16世紀後半のポルトガル人・スペイン人による見聞録、そしてカンボジアの『王朝年代記』である。とくに多くの素材を提供しているのは『王朝年代記』であるが、編纂のもとになった史料が明らかになっていないことと、現存する最も古い版（タイ語訳のみ現存）の作成年代が1796年であることから、とくに18世紀以前の歴史を研究するための史料としては、十分な史料批判が必要である〔北川2003〕。

通説では、「アンコール放棄」の主な原因を「シャム（アユタヤ）の侵攻」とする。「シャムの侵攻」と「王のアンコールからの移動」という2つの出来事は、確かに『王朝年代記』諸本に記述があるが、その年代がまさに同時代史料の空白期にあたっているので、『王朝年代記』の記述のみに依拠して構築されたという点で、この通説は大きな問題をはらんでいる。例えばジャヤヴァルマン Jayavarman 7世（在位1181～1218年頃）の即位と関連するチャンパー軍のアンコール侵攻は、ジャ

ヤヴァルマン自身が建立したバイヨン寺院等の壁画や、カンボジアとチャンパー双方の碑文に記されているが[松浦2019: 163-181]、アンコール王都を放棄せしめるにいたるような、「シャムの侵攻」を明示する物質的な痕跡は、少なくとも筆者が確認した限りでは、現時点までの考古学の研究成果からは見つかっていない。

カンボジア和平成立後、現地での調査環境が大いに改善して30年近く経った今日、アンコール時代末期に関しても考古学調査の結果が蓄積され、19世紀の東洋学に由来する通説の妥当性が問われ始めている。本稿は歴史学の側からこれに応えるべく、空白期前後の碑文と『王朝年代記』を再検討し、通説が構築された際に捨棄された情報、推測によって埋められた情報を見きわめ、「史料には何が書かれていたのか」を再検討することを目的とする。

## 1. 「アンコール放棄」すなわち「バサン遷都」の年代

カンボジアの『王朝年代記』では、版によって、王がアンコールからバサンBasan（スレイ・サントーSrei Santhor地方）に移った年代が異なっている。版が古い順に、ガルニエGarnier訳（1818年編纂のノンNong本のフランス語訳、1871～72年刊行）とバンコク本（1878年編纂のヌバラットNabbarat本の系統と思われる）では1388年、ムーラMoura訳（1883年刊行）では1435年、オクニャー・ヴェアン・チュオンUkañā Vāṃṇ Juon（VJ）本（1934年完成）では1431年である[北川2000: 55; 北川2003: 130-132]。つまり古い版と新しい版では、実に半世紀近くのずれがある。

フランス東洋学者のあいだでも、「アンコール放棄」の年代は一致していない。東南アジア古代史のオーソドックスを構築したセデスGeorge Coedèsは、1913年の論考で、次のように記している。クメール王ポニエ・ヤートPoñā Yātが「最終的に」アンコールを「放棄」し、「シャム人の侵攻から安全な場所」に居住地を求め、スレイ・サントーSrei Santhor地方のバサンBāsānに王宮を建設した。「年代記の大半は、この事件を1400年から1450年のあいだのこととする」が、「かなり無味乾燥

に事実を記録するにとどまり」,「この居住地の建設に関しては全く詳細を記さない」。しかしセデスが公教育大臣オクニャー・チャクレイ・ボン Okñā Čakrēi Pon から借り受けた「最新の〔年代記〕校訂本」には,「プノム・ベン Phnom Péñ の起源に関する伝承群」が含まれている [Coedès 1913: 22]。「年代記の大半」がどの版を指すのかは明記されないが,セデスのこの論考で紹介される「プノム・ベンの起源に関する伝承群」と概要が一致することから,「最新の校訂本」は VJ 本を指すと判断される [北川 2003: 131]。ゆえにこの論考は, VJ 本の編纂にセデスらフランス東洋学者の影響が及んでいた可能性を示唆するものである。

1914年に刊行された最初のカンボジア通史, ルクレール Adhémar Leclère の『カンボジア史』では, 1431年をポニェ・ヤート Chauponhéa Yéat が譲位した年としている。同王の治世は47年間で, 最初の17年間はエイントパット Eyntapath (アンコール) に住み, 次にスレイ・サントー Srey-Santhor 地方のなかのバサン Basan に移り, 1年弱のうちにチャト・モック Chado-moukh (プノム・ベン) に移って, 30年近く統治した [Leclère 1914: 221–222]。ここから逆算すると,「アンコール放棄」は1401年頃ということになる。

アンコール水利都市論で有名なグロリエ Bernard Philippe Groslier は, 1431年をシャム軍によるアンコール破壊の年としている。彼によるとアンコールは「最終的に」1430年にシャム王ボーロマラーチャー Paramarāja 2 世の攻撃を受け, 7か月の包囲戦の末, 1431年に「跡形もなく」破壊された。さらに1952～53年のアンコール・トム王宮における発掘調査によって,「1430年前後にこの遺跡の最後の居住層が放棄された」ことが判明したとし,「アンコール・トムの町全体も同じ頃に放棄されたい」と推測する [Groslier 1958: 9–10]。ただし, どのような手法でこれらの年代を決定したのかは, 明記されていない。

なお近年「アンコール放棄」に関しては, 地球的規模の気候史・環境史の側面からも説明が試みられるようになっている。リード Anthony

Reidは2015年（日本語訳は2021年）刊行の『東南アジア史 歴史を変え  
る交差路 *A History of Southeast Asia: Critical Crossroads*』で、「アンコー  
ルの人口密度は安定した降雨とトンレー・サーブ湖の定期的な洪水に  
よって増加したが、14世紀半ばに気候条件が悪化して人口を維持でき  
なくなったという仮説は、長い論争を経た後、近年の歴史気候解析に  
よって証明されたといえる。……最終的に——おそらく1431、32年——  
この帝国はタイ軍の攻撃によって陥落し首都が略奪されたが、農耕と  
神聖さの国政術という〔アンコールの〕パターンははるか以前に立ち行  
かなくなっていた」としている〔リード2021: 88〕。またトロエ Valerie  
Trouet は、①「東南アジアにおける夏の季節風の変動の歴史とクメール  
王朝への影響を研究するために」、ベトナムで採集したラオスヒノキ  
(*Fokienia hodginsii*, またはフッケンヒバ) の試料から作成した年輪年代よ  
り、「東南アジアの夏の季節風は、15世紀の王都アンコールの陥落にい  
たる数十年間、たいへん不安定だったことが明らかになっている」こ  
と、②「アンコールの主要運河のひとつにあった堆積物」から発見さ  
れた木の葉が、炭素同位体年代測定によって14世紀後半のものと判明  
し、ゆえに「アンコール陥落時には、周辺の地域から侵食された洪水  
堆積物で運河が埋め立てられていた」と想定されることを根拠に、「王  
都アンコールは相次ぐ気候不順、社会経済の悪化、政治的混乱という  
末期的な悪循環によって決定的に弱体化し、1431年ついに陥落した」  
としている〔トロエ2021: 211–214〕。「14世紀」の地球規模での気候変  
動の作用が、アンコール王都およびその影響下にあった地域にもおよ  
んでいたはずであるとする視点は極めて重要だが、そのためにはむし  
ろ、根拠が不明瞭な「1431年」に囚われているべきではないように思  
われる。

## 2. 『王朝年代記』のニピエンバット治世から

## ポニエ・ヤート治世まで

前章で見たように、VJ本の編纂自体にフランス東洋学者が関与した可能性が考えられるので、本章では現存の『王朝年代記』のなかでは古い版であるガルニエ訳（フランス語）とバンコク本（クメール語）の記述を再検討する。ガルニエ訳の本文は、1346年<sup>(1)</sup>のニピエンバット王 Prea reachea angca prea borom nipean bat 王の即位から始まる。一方バンコク本では、ニピエンバット王治世から始まる「歴史部分」の前に、「仏陀の予言」に始まる「伝説部分」が付加されている。「伝説部分」と「歴史部分」のあいだに明確な区切りはなく、「もともとの王の年代記はこれで終わり」という文の次に、「これからプレア・バロム・ニピエンバットの王の年代記の詳細が続く」という文があり、「歴史部分」に相当する記述が始まる。ニピエンバット王からポニエ・ヤート王までのガルニエ訳とバンコク本の記述は、おおむね一致している。異なっているのは、バンコク本「歴史部分」に記される最初の王がサムダチ・ブレア・バロム・ニエト Néadth であることで、同王が「今日に続く」、「領土の最初の王」とされている。

以下はガルニエ訳とバンコク本の概要であるが、バンコク本のみに記述がある④の部分のカタカナとローマ字は、バンコク本のクメール語から筆者が転記したもの、①以降はカタカナがバンコク本のクメール語から筆者が転記したもの、ローマ字は原則としてガルニエが訳文中で使用している表記である。また「アンコール王都」の名称は、バンコク本では「偉大な都」を意味する「モハー・ノコー Moha Nokor」、ガルニエ訳では「アンコール Angkor」が用いられている [Garnier 1871: 341–344; Preah Réach Pungssovdar: 69–72]。

④サムダチ・ブレア・バロム・ニエトの死後、ター・スオス Ta Suos が王位に就いた。

同王の死後、バロム・ニエトの子ブレア・バート・リエチエティーリエチが王位に就いた。

同王の死後、その子ブレア・バート・スレイ・セレイバット Srei Serei Bât がモハー・ノコーで王位に就いた。

同王の死後、その子ブレア・バロムリエチエ・ティーリエチが王位に就いた。

同王の死後、その子スダチ・ブレア・リエチ・オンカーが王位に就いた。

同王の死後、その子ブレア・スレイ・ソリヨーポア Sorriyopéarn が王位に就いた。

①1346年、ニピエンバット王がモハー・ノコーで王位に就き、1351年に死亡した。

②弟のブレア・セティエン Somdach prea sethéan が王位に就き、3か月後に死亡した。

③同年、長男のブレア・リエチエ・ブレア・バロム・ロムボンリエチエ Prea reachea angca prea borom lompong reachea がモハー・ノコーで王位に就いた。

1352年、シャム王（ガルニエ訳はラーマーティボディー Prea chau Reamea thuphey）の軍が侵攻し、王の砦を包囲した。1353年、砦は陥落し、ロムボンリエチエ王は死亡した。

④シャム王は9万家族のクメール人をクルン・テープ Krung Tép に（バンコク本）／彼の国に（ガルニエ訳）攫って行った。そして自身の子ブレア・チャウ・バーサート Prea chau Basat をモハー・ノコーの王とした。

1355年、チャウ・バーサートが死亡した。

⑤弟のブレア・チャウ・バーアート Prea Chau Baas が王位に就き、1357年に死亡した。

⑥末の息子ブレア・チャウ・コムバン・ピセイ Prea chau Combang pisey がモハー・ノコーで王位に就き、1か月後に死亡した。

- ⑦1357年、プレア・リエチ・オンカー・プレア・スレイ・ソリヨーヴォン Prea reachea angca srey sojovong reachea prea ang がモハー・ノコーで王位に就き、1366年に死亡した。
- ⑧同王の子/甥のサムダチ・プレア・リエチ・オンカー・プレア・バロムリエミエ Prea reachea angca prea borom reamea prea ang がモハー・ノコーで王位に就いた。
- ⑨1370年、同王は死亡し、弟のプレア・ダムサオクラーチ Prea reachea angca prea thom soc reach がモハー・ノコーで王位に就いた。
- ⑩1372年、シャム王プレア・チャウ・バロムリエチエ Prea chau borom reachea が侵攻し、7か月間王の砦を包囲した。1373年、砦は陥落し、王は死亡した。
- ⑪シャム王は子のポニエ・クラエク Phnea Prek (Krekの誤植か?) をモハー・ノコーの王位に就けた。同王の名をプレア・エインリエチエ Prea chau Ento reachea という。
- ⑫同年、プレア・リエチ・オンカー・プレア・バロムリエチエ・チャウ・ポニエ・ヤート Prea reach angca prea borom reachea chau phnea jeat prea ang が近習2人にプレア・エインリエチエを殺害させ、モハー・ノコーで王位に就いた。
- 1384年、王は即位式を行い、サムダチ・プレア・リエチ・オンカー・プラロム・リエチエ・リエミエティーブデイ・プレア・セレイ・ソリヨーボア・トムニーク・モハー・リエチエ Prea reachea angca Prea borom reachea thireach reamea thuphdey, etc. と名乗った。
- ⑬1388年、王はバサンに移り、続いてプノム・ペンに移った。
- ⑭1433年、王はプレア・リエチ・オンカー・プレア・ノリエイリエチエティーブデイ Prea reachea angca prea noreay reamea thuphdey prea ang に譲位した。

これを見ると1352年と1372年の2回、「シャム軍の侵攻」があり、2回とも「シャム王の子」がアンコールの王位に就いている。またポニエ・ヤート王は2回目の陥落後から「アンコール放棄」までの15年

ほどのあいだ、アンコールで統治していたことになる。この間のカンボジア史は同時代史料を欠くため、「シャム軍の侵攻」や「アンコール放棄」を含めて、歴代王の治世に関する『王朝年代記』の記述の裏付けをとることは不可能である。

### 3. 14世紀の碑文

14世紀の年代が刻まれている碑文は、管見の限りでは、バンテアイ・スレイ Banteay Srei 碑文 K569 [Pou 2001: 166–171], マンガラールタ Maṅgalārtha 碑文 K488 [Finot 1925: 393–406], コーク・スヴァーイ・チェーク Kôk Svây Ček 碑文 K754 [Coedès 1936: 14–21], 出所不明の碑文 Ka. 440 [Pou 2011: 125–132], バイヨン Bâyon 碑文 K470 [Coedès 1942: 187–189], ヴァン・チャンタラカセム Vāṅg Chānt'ārākāsem (アユタヤ Ayuth'ya) 碑文 K988 [Coedès 1964: 163] の6点が知られている。これらのうちでは、1380年にあたる年代が記された K988 のみ、前章で紹介した『王朝年代記』の記述と年代が重複するが、碑文の大半が失われてしまっているため、内容を比較検討することができない。セデスは1944年の『極東のインド化された国々の古代史』で、「現在のところ、アンコール・ワット大碑文に記される最後の王、ジャヤヴァルマーディバラメーシュヴァラ Jayavarmādiparaṃeçvara と、マハー・ニビエン Mahānippean あるいはニビエンバット Nippean Bat = Nirvānapada という諡とともに1350年頃に始まる、カンボジア年代記の最初の王たちのあいだを連結するのは不可能である。古代の碑文の王たちと、年代記の王たちのあいだの断絶は、現在のところ絶対的である」としている [Coedès 1944: 205]。

#### (1) 碑文に現れる王名

バンテアイ・スレイ碑文冒頭には、シュリーンドラヴァルマン王の出自が記されている。それによるとシュリーンドラヴァルマン王 vrah pāda kamrateñ añ Śrī Śrīndravarmadeva は、「シュレシュタヴァルマン



Śreṣṭhavarmanの血統」に属し、ジャヤヴァルマン 8 世 *vraḥ pāda kamrateṇ añ Śrī Jayavarmadeva Parameśvarapada* の治世（1243～1295年）にユヴァーラージャ *yuvārāja*（皇太子）となり、王女シュリーンドラブーペーシュヴァラチューダー *vraḥ bhagavati kamrateṇ añ Śrī Śrīndrabhūpeśvaracūdā* と結婚し、後に譲位により即位した。ヤジュニャヴァラーハ *vraḥ guru kamrateṇ añ Yajñavarāha*<sup>(2)</sup> の血筋で、ジャヤヴァルマン 8 世治世に王に仕えていたマドゥレーンドララージャパンディタ *vraḥ kamrateṇ añ Śrī Madhurendra rājapaṇḍita* が、即位式を行った。その後の文中には、シュリーンドラヴァルマン王が王令を発する原因となった事件が、ジャヤヴァルマン 7 世 *vraḥ pāda kamrateṇ añ Mahāparamasaugatapada* の治世に発生した旨が記されている。末尾には、この事件の裁定はシュリーンドラヴァルマン王と王妃シュリーンドラブーペーシュヴァラチューダーの業績であることが記されている。

マンガラルタ碑文には、ジャヤヴァルマン 7 世 *Çrī-Jayavarman*, インドラヴァルマン 2 世 *Çrī-Indravarman*, ジャヤヴァルマン 8 世 *Jayavarman*, シュリーンドラヴァルマン *Çrīndra*, シュリーンドラジャヤヴァルマン *Çrī-Çrīndrajayavarman* の歴代王が現れる。ジャヤヴァルマン 8 世からシュリーンドラヴァルマンへの譲位、さらにシュリーンドラヴァルマンからシュリーンドラジャヤヴァルマンへの譲位もこの碑文から判明する。

コーク・スヴァーイ・チューク碑文には、シュリーンドラヴァルマン王が現れる。パリー語文では「月（1）—対（2）—月（1）—護符（8）（サカ暦1218年、西暦1296年）、ヤショダラプーヤ *Yasodharapura*〔アンコール〕にシュリーンドラヴァルマン *Sirisirindavamma* という名の王がいた」と記され、クメール語文ではヴラ・パーダ・カムラテン・アン・シュリー・シュリーンドラヴァルマデヴァ *vraḥ pāda kamrateṇ añ Çrīçrīndravarmma-deva* と記されている。

出所不明の碑文 *Ka. 440*（1311年）では、ドゥーリ *dhūli*・ヴラ・パーダ・ドゥーリ・ジェン *jeṇ*・ヴラ・カムラテン・アンという称号のみが

記され、王名は判明しない。

ニビエンバット治世以前の事柄を記しているはずの『王朝年代記』「伝説部分」には、これらの14世紀碑文に記された歴代王の名や事績は現れない。さらにサンスクリット語およびパーリ語文に見られる「月一対一月一護符」のような年代の示し方も、『王朝年代記』や16世紀以降の碑文には見られない。

## (2) 王による土地や村の寄進

マンガラルタ碑文、コーク・スヴァーイ・チェーク碑文、出所不明の碑文Ka. 440、パイヨン碑文には、王による村や水田の寄進と、その境界の設定に関する記述がある。例えばコーク・スヴァーイ・チェーク碑文のパーリ語文には、以下のようなシュリーンドラヴァルマン王の事績が記されている。

月 (1) 一対 (2) 一火 (3) 一天 (0) (サカ暦1230年、西暦1308年)、王はマハーテラ・シリ・シリンドタモリ Mahāthera Sirisirindamoḷi にシリ・シリンドラタナガーマ Sirisirindaratanaḡāma (村) を与えた。シリ・マリーニーラタナラッキー Sirimālīnīratanaḡakkhī という名の優婆夷<sup>うばい</sup>、王の装身具の守護者が、(王の) 命令により、ここに新しい布薩堂 vihāra を1つ作り、堀を1つ、池を1つ掘らせた。月 (1) 一対 (2) 一火 (3) 一月 (1) (サカ暦1231年、西暦1309年)、(王の) 命令により、彼女は仏像1体を造立させ、男女の奴隷やその他のものを寄進した。

王はバクラッタラ Bakulatthala、ダムダーム Daṃḍām、ターリーサッタラ Tālīsatthala とナドヤッグ Nadyagga の村々を仏陀の儀式のために与え、それらの8方の境界を定めた。シリ・シリンドラタナガーマ村の境界の内側では、8つの土地が僧侶たちに与えられた。

王が与えた村や水田の詳細および来歴に関しては、クメール語文の方がパーリ語文よりも詳しく書いている。また王の命令によって寺院や堀、池を建設したのが女性の官人であることも、注目に値する。彼女

の名は、クメール語文では「王の装身具（の役職の）カムラテン・アン・シュリー・マリーニラトナラクシュミー Çrī Māliniratnalakṣmī」と記されている。さらに高僧シリ・シリンドラモリはシュリー・シュリーンドラマウリデヴァ Çrīndramaulidevaと記されており、仏像にはヴラ・ヴッダ vuddha・カムラテン・アン・シュリー・シュリーンドラマハーデヴァ Çrīndramahādeva という名がつけられている。

土地や水田、村の寄進、そして境界の決定は、16世紀以降の碑文にはほとんど見られない<sup>(3)</sup>。また上記の碑文に現れる地名も、現在の地名との同定は困難である。

### (3) 人員の寄進

コーク・スヴァーイ・チェーク碑文クメール語文、出所不明の碑文 Ka. 440、バイヨン碑文には、寄進された奴隷の名とその役割が列記されている。例えばバイヨン碑文の末尾には、「プラーン phlān の花摘みを担う奴隷 dāsa：シー si（男性）・カムピト kāmptit, シー・カンジョン kañjoñ, ギー・カシャルマ gi kaçarmma, シー・カヴィンシャ kaviñça, シー・アーディト ya āditya, シー・ヴッダシャルマ vuddhaçarmma。シヴァ神に供犠した料理の残りを掃除する奴隷 dāsa：タイ tai（女性）・シャニ çani, タイ・カラー karā と娘 2 人, タイ・カムヴラウ kāmvrâu と娘 1 人, タイ・サウバグヤ saubhagya。女性男性大小計13人」と記されている。

後に分析する1566年の IMA4 を最後に、それ以降の碑文には、人員の寄進は現れない。また奴隷の名の前に付されている語も、14世紀までと16世紀以降では全く異なっている。

## 4. 15世紀の碑文

### (1) テナセリム Tenasserim 刻文 K1121～1124 [Coedès 1965: 203–209]

管見の限りでは、現在のカンボジアの領域内からは、西暦で15世紀に相当する年代の碑文は見つかっていない。ただしマレー半島西岸の

テナセリムで、西暦1462～1466年にあたるサカ暦1384年午年、1385年未年、1387年酉年、1388年戌年という年代と、クメール語が刻まれた「金の薄い板」が見つかっている<sup>(4)</sup>。セデスによると、「金の薄い板」は「長さ0m26×幅0m065」, 1957年にアユタヤのワット・ラージャペーラナ Vat Rājapūrāṇa の地下室の1つで発見されたものと同じタイプで、全て同じ形式で作られていた。すなわち最初に日付があり、刻文I (K1121), II (K1122), IV (K1124) では王名の後に王令の定型文があつて、braḥ varaprasiddhi という句の後に、貴族あるいは官人の称号が1つあり、さらに oy (与える) という語が続く。刻文I, III (K1123), IV では、左側の余白に1人の名が書かれている。また刻文IIIは、王令ではなく、王の師による文章が刻まれている<sup>(5)</sup>。以下はセデスの解釈である。

刻文I：サカ暦1387年酉年 Puṣya 月望6日日曜日, Mē Nān Mōaṅ S'rī Agrarājadevī の称号を Mē Nān Agrarāja に与えるという王令 vraḥ rājaoṅkāra saṃtac pavitra vraḥ parapas[i]ddh[i] があつた。

刻文II：サカ暦1384年午年朔10日火曜日吉時, vraḥ rājaoṅkāra saṃtac braḥ Rāmādhipati S'rīs'rīndraparamacakrabarti Rājādhirājā Rāmes'vara Dharmarāja Tejo Jayabarma Debātideba Tribhubaṇādhipes'a Paramapabitra の命で、……に Khun S'rī Sudars'ana Rājādhirājā の称号を与えた。

刻文III：サカ暦1388年戌年 Asādha 月朔10日月曜日吉時, Rāmādhipati S'rīs'rīndraparama cakrabartirāja の師である Saṃtac Braḥ Guru, Saṅgharāja Saṅghaparināyaka Tilakaratna mahāsvāmi S'rī Parakramabāhu, サンガ Saṅgha の全成員と Ba Khun S'rīs'rī Sudassana Rājādhirājā の言があり、……に Braḥ Mahāthera Sudassana Debācārya の称号を与えた。

刻文IV：サカ暦1385年未年 Phālguna 月望日曜日, braḥ rājaoṅkāra saṃtac braḥ Rāmādhipati S'rīs'rīndraparamacakrabarti Rājādhirājā Rāmes'vara Rājādhirājā Tejo Jayabarma Debātideba Tribhubaṇādhipes'a

pavitraの命で、Nāy YにKhun S'rī Agrarājaの称号を与えた。

セデスは刻文に現れる王名(Rāmādhpati)について、当時のアユタヤ王トライローカナートParamatrailokanātha(在位1448～1488年)には相当しないとする一方で、「アンコール・ワットの未完の浮彫を1546～1564年に完成したクメール王の名とほぼ同一」で、s'ris'rīndra(III,IV)やjayavarman(IV)などの要素はアンコール時代の王名を想起させるとする。セデスがテナセリム刻文の王の候補とするのは、「1473年か1476年のアユタヤ王の介入」によって、「甥のスレイ・ソリヨーテイS'ri Suriyodayaとともにアユタヤに連行された」とカンボジアの『王朝年代記』に記されているという、リエチエティーリエチ・リエミエティパティRājādhirāja Rāmādhpati王である。セデスはこの事件が『アユタヤ年代記』諸本に記されていないこと、事件の年代がテナセリム刻文の年代とずれていることを認めながらも、「刻文の証拠としての価値は、異論の余地なく、後代の編纂物である年代記の証拠としての価値を凌駕する」として、「シャムのカンボジア干渉は、1473年あるいは1476年ではなく、テナセリム刻文の最も古い年代である1462年以前に起こった」と結論づける。

しかしながら、このテナセリム刻文の存在のみを根拠に、『アユタヤ年代記』に記されず、カンボジア『王朝年代記』でも年代が異なる「シャムのカンボジア干渉」が、史実であると判断することには無理があると筆者は考える。さらにセデスはここでも、『王朝年代記』のどの版を参照したのかを明示していない。当該の事件は、ガルニエ訳とバンコク本では以下のように記されている[Garnier 1871: 345–347; Preah Réach Pungssovdar: 72–73]。

- ①1437年、王(ノリエイリエチエ)が死亡し、ガルニエ訳によるとスレイ・ソリヨーテイ Prea reachea angea prea srey soryo tey reachea prea ang, バンコク本によるとプレア・スレイリエチエ Srei Réachéa が王位に就いた。

- ②ガルニエ訳によると「王族の間に大きな争いが起こった」。バンコ

ク本によるとプレア・リエチ・オンカー（王）とプレア・スレイ・ソリヨーテイリエチエの2人が戦った。

③1468年，サムダチ・プレア・リエチ・オンカー・プレア・トアマリエチ・ティーリエチ・リエミエティパテイ Prea thommo reacha threatch reamea thuphdey王（ポニエ・ヤートの子）がプノム・ペンで即位した。

④1476年，治世9/8年目30歳，王はシャムに兵を求め，シャム王は兵を率いてきて，サムダチ・プレア・リエム Réam（王の兄）とサムダチ・プレア・ペアカニョー Somdach phacniea<sup>(6)</sup>を捕え，クルン・テープに連れて行った。

⑤1504年，治世37/36年目58歳，王は死亡した。

これを見ると，リエミエティパテイという王はシャムに連れ去られていない。以上の理由から，テナセリム刻文の Rāmādhīpati はカンボジア王にも相当しないと判断する方が妥当であり，アユタヤ王ラーマティボディー（1世の在位1351～1369年，2世の在位1491～1529年）でもないとするならば，現時点では，どのような人物であるのか確定できない。テナセリム刻文に関して注目すべきはむしろ，14世紀前半までの碑文とは異なり，王名にヴラ・カムラテン・アンという称号が付されていないことではなかろうか。

松浦によると，スーリヤヴァルマン Suryavarman 1 世治世（在位1002～1050年）の王令を記した1022年の碑文が現在のタイ中央部のロブリーから発見されており，これはアンコール朝がタイ湾岸地域の港市へのアクセスを確保したことを意味する。またスーリヤヴァルマン2世治世中（在位1113～1150年）の1116年に中国への朝貢が再開され，12世紀後半には，カンボジア（真臘）がチャンパー（占城）とならんで，「インドシナ半島からマレー半島北部の物流の中心地」として認識されていた〔松浦2022: 264-266〕。他方石井によるとロブリー（羅斛）は，『諸蕃誌』（1225年）では真臘の属国とされているが，ジャヤヴァルマン7世の死後独立傾向を強め，1278，81，89，91，96，99年に朝貢を繰

り返し、『大徳南海志』（1304年）では独立国として扱われている〔石井2020: 152–155〕。

1295～1297年に真臘を訪れた周達観の『真臘風土記』に、暹人との戦いに関する記述があることはよく知られている。「暹」の初出は、『宋史』の1282年に関する記述である。深見によると、この頃の暹は、石井米雄によって「タイ湾北部の諸港市国家の総称」である可能性を提唱されており、また明代における暹羅はアユタヤを指すという。暹は遅くとも南宋末1270年代までに、泉州海商の交易ネットワークに含まれ、また13世紀後半には、クメール（真臘）、ロップリー、ターンブラリング（単馬令、ナコンシータマラート）と並ぶタイ湾の有力勢力となっていた。さらに『元史』には、以下のような情報が記されている。1294年に必察不里城（ペッチャブリー）の敢木丁（カムラテン）が遣使来貢した。元朝は必察不里の敢木丁を暹国王として扱い、自ら来朝するよう求めた。暹は翌1295年にも朝貢し、この朝貢使の帰国に伴って派遣された招諭使が、「暹人は長くマラユ（麻里予児）と敵対していたが、今ではみな元に服属したのであるから、マラユを攻撃してはならない」という詔を伝えた。この記述は、暹が武力をもってマレー半島に干渉していたことを示す史料とされる。深見はさらに、マジャパヒト（ジャワ）の『デーシャワルナナ（ナーガラクルターガマ）』（1365年）では、かつてのターンブラリングがダルマナガリー Dharmanagarī の名で記され、シャムの勢力範囲となっていることを指摘する〔深見2013〕。

以上から、13世紀後半以降のタイ湾およびマレー半島地域における暹の勢力の伸長が確認できる。さらに王の称号に関連して、13世紀末における「必察不里の敢木丁」の存在にも注目すべきであろう。その後テナセリム刻文の15世紀半ばまでのあいだに、この地域においても、王あるいは地域の支配者の称号としてのカムラテンは消失したと想定される。

## 5. 16世紀の碑文

(1) トゥオル・チャールック Tuol Charek 碑文 K106 [Pou 1989: 18–19]

現在のトボン・クモム Thbounng Khmum 地方クラン Krang 村別名 トゥオル・チャールック（石柱の丘）で発見されたクメール語碑文で、1558年にあたる年代が記されていた。エモニエ Etienne Aymonier によると、年代のほかには、標石で区切られた（おそらくは宗教施設の）土地、仏法、僧侶の集会、この施設に石柱を残した 1 人の王、1 人の王妃、仏舍利と供物、天蓋、日傘に関する記述があり、固有名詞はなかった [Aymonier 1900: 282]。

さらにエモニエによると、クラン村の周辺にはブレ・アンコール時代、アンコール時代に遡る遺構や碑文があった。クラン村の 800m 南にはプーム・プラサート Phûm Prasat 別名 プーム・プレア・ティエト Phûm Preah Théat の村があり、「荒廃したレンガの塔 1 基」と「刻文がある石柱の破片」があった。この碑文はサカ暦 6 世紀のもので、ヴァー vā や クー ku の語を冠した奴隷の名簿が刻まれていた。またクラン村の 1800m 北にはプーム・ミエン Phûm Mien の村があり、やはり「荒廃したレンガの塔」があって、その門の右手壁には、912 年あるいは 902 年、986 年、987 年の碑文が刻まれていた [Aymonier 1900: 281–283]。

(2) ワット・ノコー Vat Nokor 碑文 K82 [Filliozat 1969]

ワット・ノコー寺院はメコン西岸に位置するコムボン・チャームの町の西郊にあり、「カンボジアで最も古いサンスクリット語碑文の 1 つ」が出たハン・チェイ Han Chey 遺跡の下流に位置する。ワット・ノコーは最初、1200 年頃に建立され、16 世紀に上座部仏教の寺院に改変されたと考えられている。当初中央祠堂の上に建てられていた塔は、現在では、仏塔 cetiya の形の構造物に置き換えられている。祠堂の東入口の正面に、1566 年にあたる年代を含む、パーリ語文とクメール語文が刻まれた石柱がある。



パーリ語文には、1組の夫妻の名が現れる。フィリオザ Jean Filliozat の解釈では、夫は「シリ・ソガンダパダ Siri Sogandhapada の優れた名において、王として認められ、マハー・パラマ・ニッバーナパダ Mahāparamanibbānapada という戒名を得た」と記され、妻は「高貴な娘、優婆夷、優れた姉、高貴なルーパソバー Rūpasobhā が彼の妻、唯一の王女 rājaputī eka (dhī) tā であった」と記される。フィリオザは前者について、「ソガンダパダすなわちスカンダ Sugandha の住居に居る者」と「マハー・パラマ・ニッバーナパダすなわち涅槃の居所にまで進んだ者」という語は、「身分ある1個人の2つの諡」であるという解釈を示す。クメール語文では、前者に相当すると思われる人名、サムダチ・オクニャー・ヤシ・シュレイ・サウカンダバット samtec okñā yasy Śrī Śaugandhapad が登場する。

さらにパーリ語文によると、夫妻は「ジャヤビラサクティナガラム Jayyabirasaktinagaram (Jayavīraśaktinagara) という名の素晴らしく魅力的な古代の王国 purāṇarāja (purāṇarajja) のなか」の、「神殿の塔の上」に、青銅の仏像と仏舎利を設置した。他方クメール語文には、1566年に、「サムダチ・オクニャー・ヤシ・シュレイ・サウカンダバットが、ここチャイヤビラサークティ Jaiyabirasākti において、仏舎利 dhātu を建てた」、「彼は大布薩堂 mhāvihāri と標界石 semā を建て」、「カム・アン・モハー・ノコー・セーナー・パピット kam añ Mahānāgasenapabitr に任せた」と記されている。フィリオザは、パーリ語文のジャヤビラサクティナガラムとクメール語文のチャイヤビラサークティは、現在のワット・ノコーが建てられている場所を指すと解釈している。

### (3) アンコール・ワット近世碑文

IMA4・IMA5・IMA6 [Lewitz 1971]

IMA4・5・6は、オク・ルオン・アペイリエチ uk-hluon Abhayarāj という名の官人が関連した積徳について記している。最も古い IMA4 の前半には、1566年(寅年)の日付が記され、オク・ルオン・アペイリ

エチと妻のネアク・オク・トア anak-uk Dhammが、卯年「オクニャー・オン uk-ñā Oñ のとき」から布薩堂 braḥ vihāraspāt の建設を始め、寅年「ネアク・プレア・オンカー・プリトニビエン anak-braḥ-oñkār Pṛitibbān (のとき)」に完成した旨が記されている。続けて夫妻の事績として、仏像などの造立や、「この布薩堂の仏像の下僕 ñom として」, 「アー ā (男性)・チャーン Cand, アー・カエウ Kaev, メー me (女性)・ソト Suddh, メー・アン An, メー・ナイ Nai, メー・サー Sa, メー・ラス Ras', メー・サム Sam, メー・ハン Hañs, メー・キエム Gām, アー・ノーク Nok, アー・カン Kan, アー・サエン Saen, アー・スレイ Sṛī, アー・チョート Joti という名の男女の奴隷 dāsā dāsī khñamṃ çriy」を寄進したことが記される。

IMA6は1599年に、オク・ルオン・アペイリエチらが、プレア・ピスヌローク Braḥ Bisṇulok (アンコール・ワット) に「来て」、積徳を行ったことが記されている。プレア・ピスヌロークという場所 sthān は、「モハー・クセート mahāksetr の神々 devatā (主な神々), 全能のモハー・ブロームラシ brahmaṛṣi (婆羅門の苦行者), 守護神や祖霊たちの群れの集まる場所である」と説明されている。後半には、「あらゆる敵が打ち碎かれますように。カンボジアの国 kaṃmbujades に困難を引き起こし、教え sāsna や仏舍利 braḥ mahāsārikadhātu を破壊しようとする者があれば、神々が王の敵の心を和らげそれらの悪行を妨げますように。カンボジア中の人々が平和を享受し、困難に遭いませぬように」という祈願文が記され、その後「我らが主たる全能者のお言葉通りに」という意味の、「プレア・モハー・サラペチ・プット・クラテン・イエーン・サムダチ・バントゥール・ホーン braḥ mahāsarbvajñabuddh krateñ (=kaṃrateñ) yeñ samtec pandūl hoñ」という語が記されている。

#### (4) IMA2・IMA3 [Lewitz 1970]

IMA2は1577年の日付が記され、「高貴な生まれの王女」, 「偉大かつ尊い優婆夷」である王の母マハーカルヤーナヴァデイ・スレイソチエ

ター Mahākalyāṇavattī Āṇandī の積徳が、1 人称で語られている。彼女は「自分の王子である王」が「昔のカンボジア kumvuj purān のプレア・ピスヌローク」を修復し、「昔の繁栄を戻した」ことに感銘を受け、自分の「素晴らしい鬘」を捨て、プレア・ピスヌロークで儀式を行い、自分の髪を焼かせて得たクモク kmuk（樹脂と混ぜた灰）を使い、バカン Pākān（アンコール・ワットの中心祠堂）の仏像を造った。

IMA3は「高貴な優婆塞<sup>う ぼ せ く</sup>」かつ「偉大な王」であるサムダチ・プレア・チェイチェッター・ティリエチ・オンカー・バロムリエチエ・ティリエチ・リエミエティパテイ・シュレイトリバヴァニエティトヤボア・トアマミカリエチ・モヌヴォンサオター・モハー・バロムチャッカパティリエチ・カムプチェーソー・ソリン・テーチョーチェーイ・トレイラタナモコト・ヴィソト・チナサーサナトー・バロマトバタムパカリ エ チ brah Jayajetṭhādhirājaonkār Paramarājādhirāj Rāmādhīpati Āṇandī ʾbhuvanādityabarm Dhammamikarāj Maguvaṇsottar Mahāparamacakkabattirāj Kambujesūr Surind Tejojay Trairatnamakuṭ Visudh Jīnāsānādhār Paramatthuppathambakarāj の積徳を記したもので、彼の王子の誕生日であるサカ暦1501年卯年（西暦1579年）アーサート asadh 月朔14日水曜日という日付が現れる。王名にヴラ・カムラテン・アンという称号は付かないが、サンスクリット語の ʾbhuvanādityavarman にあたる, Āṇandī ʾbhuvanādityabarm という語が含まれていることが注目される。また年代の一致から、「天正七年己卯（西暦1579年）仲冬」付の島津義久書簡の宛先「南蛮國甘埔寨賢主君浮喇哈力汪加」およびその前年と思われる大友義鎮宛書簡の差出人「東埔寨浮喇哈力汪加」とは〔新田2021: 184-186〕、同じ王と見てよいであろう。

王は即位したときプレア・ピスヌロークを修復して石を積み、「9つの先端を持つ尖塔付きの屋根」を修繕して金を塗り、仏舍利を奉納し、功德を「4人の祖父母、故父王、7世代の王族全員」に送った。そして、「仏の教え sāsna brah Tathāgat をカンボジアの国に根づかせ、王族の栄光を昔のように高め、破滅を防ぐ」というかねてからの望みをか

なえようとした。

王妃サムダチ・ブレア・バカヴァティ・シュレイチャッカパティ・アケアリエチマヘーセイ・ブレア・ピタラニントラチューイヤリエチテーピ・シュレイトアマティダーバピット bhagavati Āṇḍakabattī Aggarājamahesī Brah̄ Bidharaṇīndrajayarājadebī Āṇḍhammadhitā pabitrが懐妊したとき、王は、生まれてくる子が男児であれ女児であれ、優婆塞、優婆夷として三宝に捧げると誓った。さらに王子であったならば仏陀の子として捧げ、出家の後に王位に就くことになることを誓った。王子が誕生して12日後の日曜日に、母なる王妃、王の教師、占星術師、婆羅門の教師たちが集まって命名の儀式が行われ、父なる王は王子をサムダチ・ブレア・バロムリエチエ・ティリエチ・バピット Paramārājadhīrājapabitrと名づけた。そして「モハー・クセートの神々、全能のモハー・プロームラシ、守護神や祖霊たちの群れの集まる場所」であるブレア・ピスヌロークに連れて行き、尊い優婆塞として三宝に捧げた。

さらに王子の成長と幸運、長寿を願う祈願文のなかには、将来「トアマリエチ dharmmarāj として、このカンボジア王国 kaṇḍibujjarāstr のなかに仏の教えの完全な繁栄をもたらしますように」、「ブレア・モハー・ノコー・エイントラブラシュ mahānagar indrapraṣṭh (アンコール) とブレア・ピスヌローク、このカンボジアの国のあらゆる場所にある全ての砦を建てた昔 pūrān の王の祖先のように、平穏を得られますように」という文言が現れる。その後に王と2人の王妃、王子、王の母、側妾たち、王の教師、婆羅門の教師たち、4大臣、役人たちなどの幸運を祈り、「あらゆる敵が打ち砕かれますように。このカンボジアの国に困難を引き起こし、教えや仏舎利を破壊しようとする者があれば、神々が王の敵の心を和らげそれらの悪行を妨げますように。カンボジア中の人々が平和を享受し、困難に遭いませぬように」という祈願文が記され、最後に「ブレア・モハー・サラペチ・ブット・カムラテン・イエーン・スダチ・バントゥール・ホーン」という句が記されている。

## (5) プノム・バケン Phnom Bakhèng 碑文

K465/K285 [Pou 1989: 20–25, 26–27]

K465とK285は同じ内容で、1583年にあたる年代が記されている。サムダチ・プレア・リエチエムニ・バピット Rājamuni Pabitre という高僧がプノム・バケン<sup>(7)</sup>の頂上に「やって来て」、柱を建て、昔の仏像が壊れていた<sup>(7)</sup>ので26体を修理し、朱砂を塗り、金を貼った。さらに彼はプノム・リエチ・トロアプ Bnamm rajadraby (ロンヴェーク Longyeack およびウドン Odongk 王都の南に位置する聖山) にいたとき、壊れていた50体の仏像を修復し、水銀を塗り、金を貼り、[修復した仏像の] 各対に三界を描いた布を奉納した。また6<sup>ひろ</sup>尋の涅槃仏と布薩堂 brah bihar を修復した。これらの功德を「カンボジアの国 groñ kāmabūjades を守る神々」と、「プレア・バート・チェイヤチェッター・ティリエチ・オンカー・バピット brah [p]ād jeyajetthādhiraj onkār pabitr という名の大優婆塞たる大王」に送り、王が「このカンボジア国を堅固に統治し」、「敵を退ける」ことと、「王子が王の後継者となれること」を祈願した。

なお『王朝年代記』ガルニエ訳とバンコク本では、プノム・プレア・リエチ・トロアプ山に大仏と涅槃仏を建てたのは、ロンヴェーク Lovec 王都の建設者チャンリエチエ Chau phnhea Chan 王となっている [Garnier 1871: 348–349; Preah Réach Pungssovdar: 74–75]。

1528年、王は砦を出てロンヴェークに移った。石で築いた下側に、上から土を積み重ねて砦を建造させ、石の足を持つ4体のアラス仏を建てさせ、四方を向かせて背中合わせに置いた。ワット・トロラエン・カエン Traleng Keng を建てさせ、中央のプラサートは彫刻を施して鏡を置き、一面に金を貼った。プレア・リエチ・トロアプ Prea reach trop の山頂に石の仏像を建てさせ、涅槃像を建てさせた。

(6) プノム・クーレーン Kulèn のプレア・トム Preah Thom 碑文

K715 [Pou 1989: 28–31]

K715は1586年にチャウ・モハー・コーサル co mahākūsal という人物がプレア・クポーン braḥ khbūn (聖なる山) に来て、仏陀に詣で、髪と眉、体毛を焼いてクモクを作り、損傷した仏像を修復し、様々な場所で10体の仏像を修復した旨が記されている。

16世紀の碑文に関して注目されるのは、王名にヴァルマンが含まれる一方で、ヴラ・カムラテン・アンの称号が付されていないことである。また寺院に寄進された人員の名の前に付された語も、14世紀碑文とは異なっている。さらにワット・ノコーやアンコール・ワット、そして各地に残る古代の神殿遺構が「昔の王の祖先が建てたもの」、「昔のカンボジアのもの」と認識され、仏教によって「昔の繁栄」や「平穏」が実現され、王によるカンボジアの統治が堅固なものとなるよう祈願されている。「カンブジャ（カンボジア）国」という国号は、アンコール時代の刻文史料に遡る [松浦2022: 255]。アンコール時代の具体的な王名の言及はないものの、王国としての連続性の認識と、昔の繁栄を喪失したという認識が読み取れる。

6. 『王朝年代記』のチャンリエチエ治世から

サター治世まで

(1) アンコールの「修復」

ガルニエ訳とバンコク本には以下のような記述がある [Garnier 1871: 352; Preah Réach Pungssovdar: 76]。

1570年治世5年目51歳、王（チャンリエチエ王の子パロムリエチエ Sombdach prea borom reachea）はコムボン・クラサン Compong Crossang に居を移し、兵を率いてシャムのリエチ・セイマー Reach sema 地方を奪い、多数の捕虜を得た。

さらにガルニエは脚注で、コムボン・クラサンは大湖の入り口、ロンヴェークの北西に位置するとし、かつポルトガル人の記録によると同1570年にはアンコール遺跡群が発見され、その建設者がアレクサンドロス大王だとされていると記している。

グロリエはこの脚注を誤りとし、コムボン・クラサン Kompong Krassang にはシエム・リエブ Siemreap の南、ストウン stung・シエム・リエブ沿いのプーム・クラサン Phûm Krassang が該当するとしている。さらにグロリエによると、クート Diogo do Couto という人物による「未刊の1章」には、1550年か1551年に、この地域で狩りをしていたカンボジア王がアンコール・トムを再発見し、その豊かさに魅せられて、ここに王宮を置いたと書かれていた。サン・アントニオ Gabriel de San Antonio も1570年のこととして、同様のアンコール・トム再発見を報告している。ジャック Christoval de Jaque は発見者をアブラムランガラ Apramlangara, すなわちサター Sâtha 王だとしている。そのほか単に「最初のカトリック宣教師が到着した頃」とするものもある。グロリエはこれらの情報を根拠にして、チャンリエチエ Ang Chan からバロムリエチエ Barom Reachea, サター治世のあいだにアンコール・トムの発見・修復・王宮の(再)設置があったとした [Groslier 1958: 21-23]。なおバロムリエチエ治世の出来事を扱った節では、ガルニエ訳にある1570年のコーラート Khorat 遠征とその準備のためのコムボン・クラサンへの移動に触れ、『アユタヤ年代記』にもこの「コーラート占領」が1570年の事件として現れる旨を記している [Groslier 1958: 15]。

またグロリエは、チャンリエチエ王治世の出来事を扱った節で、シャムがビルマと交戦中であり、1569年にアユタヤそのものが陥落させられるような状況であったことを利して、同王はシャムに対する「報復」侵攻を複数回行い、カンボジアの「過去の威光」を「わずかながらも奪回」したとする。しかしチャンリエチエ王の後継者たちは「見劣りがする人物」であったため、これは「つかの間の成功」に過ぎず、「シャムでは、1558年(ママ)に即位したナレースアン Preah Nareth が、

即座に雪辱を果たした」としている。この節におけるグロリエの記述は、年代が交錯していて、どれをチャンリエチエ王治世の出来事であったとするのが把握しづらい [Groslier 1958: 14-15]。一方石井のアユタヤ通史を見ると、16世紀のシャム-カンボジア関係は以下のようになる。アユタヤがビルマ軍の攻撃によって苦しめられていることを知ったカンボジアは、1570～87年にかけて6回にわたりシャムに侵入を繰り返し、チャンタブリー、ベッチャブリーなどのタイ湾沿岸の港市を攻撃して、住民を拉致した。またナレースアンは1581年にビルマ王バインナウン（在位1551～1581年）の弔問のためビルマに赴き、タウンゲー朝の弱体化を知ると、1585～87年にかけて繰り返しビルマを攻撃して勝利し、1590年に独立を回復したアユタヤの王として登位した（在位1590～1605年）[石井2020: 173]。

カンボジアとアユタヤの『王朝年代記』に現れる1570年の遠征が史実であったのかどうかは、厳密に言えば、双方が互いに参照しあっている可能性が高いため、現在の史料状況では確定できない。しかしIMA2・3とK465・285から明らかになるのは、少なくとも1577年から1583年までの時点で在位していたカンボジア王が、チェイチェッターという王名を持ち、少なくとも1人の王子の父であり、アンコール・ワットを「修復」し、おそらくは1578/79年に大友氏・島津氏と通交した王だということである。これを「見劣りがする人物」と評価すべきであろうか。16世紀後半の大陸部東南アジアに関しては、今後ポルトガル語・スペイン語史料の精査が進み、より信頼に足る情報が得られるものと期待される。

## (2) サカ暦1501年（西暦1579年）卯年生まれの王子

サヴェロス Saveros Lewitz はIMA3の王について、「歴史学者の言うチェイチェッター Chey Chettha 1 世」と括弧書きをつけ、IMA2の「王の母」の息子に当たる人物だとしている [Lewitz 1970: 106]。一方マック・ブアン Mak Phoeun はバロムリエチエ Paramarājā IV 世（サター Saṭṭhā）



王としている [Mak 1995: 34]。グロリエもサター王とし、IMA3に誕生が記されている王子はその次男チャウ・ポニエ・トン Chau Pnhea Ton とする。その主な根拠となっているのは、ガルニエ訳との年代の一致である [Groslier 1958: 17-18]。ガルニエ訳とバンコク本には以下のよう

に記されている [Garnier 1871: 353; Preah Réach Pungssovdar: 77-78]。  
1576年、王（バロムリエチエ）が死亡し、その子のプレア・サター Sombdach prea satha が24歳で、サムダチ・プレア・リエチ・オンカー・プレア・バロムリエミエ・ティーリエチ・リエミエティパティ Prea reachea angca prea borom reachea reamea thupdey という名で、バンティエ・ロンヴェークで王位に就いた。王は偉大な家系の娘を王妃とした。名をサムダチ・プレア・ペアッカヴァデー・スレイ・チャカボアット・リエチ Prea pheaccovotei srey chackha peadey という。

この部分以降、ガルニエ訳とバンコク本の記述にはかなりの差異が見られるようになる。ガルニエ訳には以下のように記されている。

〔王妃が生んだ2人の王子のうち〕1人はサカ暦1496年（西暦1574年）に生まれ、プレア・チェイチェッター Prea chey chestha と名づけられ、もう1人はサカ暦1501年（西暦1579年）に生まれ、チャウ・ポニエ・トン Chau phnhea ton と名づけられた。サカ暦1502年（西暦1580年）、ペーン Peng という名の妻から、チャウ・ポニエ・ニョーム Chau phnhea nhom という名のもう1人の王子を得た [Garnier 1871: 353-354]。

またサター王の弟の子どもたちに関しても、以下のような記述がある。

〔1593年のロンヴェーク落城後に〕ラオスに行ったバロムリエチエ Prea reachea angca prea borom reachea 王（サター王）の弟サムダチ・プレア・スレイ・ソリヨーボア Sombdach prea srey sorpor は、ウパヨリエチ obbajureach（副王）であった。彼は親族であるチャウ・ポニエ・スオス Chau Phnhea sos の娘を娶った。サカ暦1501年（西暦1579年）、24歳のとき、妻のプレア・リエチエ・テビ Prea reachea

tapiから1人の王子を得、チェイチェッター Prea chey ches thaと名づけた。サカ暦1511年（西暦1589年）にもう1人の王子を得てウテイ Prea outeyと名づけた [Garnier 1871: 355–356]。

一方バンコク本では王妃が王子2人を生んだこと、チャウ・ポニエ・ニョーム王子の母の名がニエン・ペーン・リエウ Léav, つまりラオ人であることが記されているが、出生年の記述はない。ただし王妃が生んだ2人については、以下の記述から出生年が判明する。

サカ暦1506年申年治世9年目32歳の時（西暦1584年）、王は2人の王子に満足し、2人とも王位に就け、3人の王が立った。上の王子は戌年（西暦1574年）生まれの11歳、プレア・チェイチェッター・ティーリエチ・リエミエティパテイという名を与えた。下の王子は子年（西暦1576年）生まれの9歳、プレア・リエチ・オンカー・プレア・バロムリエチエ・ティーリエチ・リエミエティパテイという名を与えた [Preah Réach Pungssovdar: 78]。

これを見ると「下の王子」の出生年が、ガルニエ訳と一致しない。

一方スレイ・ソリヨーポアの子どもたちに関しては、チェイチェッターがサカ暦1540年（西暦1618年）に即位し、サカ暦1543年酉年治世4年目（西暦1621年）に43歳であり、サカ暦1549年卯年治世10年目（西暦1627年）に49歳で死亡したことが記されているので、サカ暦1501年（西暦1579年）の出生と逆算される。また弟のウテイリエチエはサカ暦1563年巳年（西暦1641年）に53歳で死亡したことが記されているので、サカ暦1511年（西暦1589年）の出生と逆算される [Preah Réach Pungssovdar: 83–85]。

つまりサカ暦1501年卯年（西暦1579年）には、ガルニエ訳に従うならばサター王の第2王子と後のスレイ・ソリヨーポア王の第1王子でその後継者となるチェイチェッターの2人、バンコク本に従うならば後者のみが誕生していることになる。したがって、IMA3の王子がサター王の第2王子であると決定することは難しく、同時にIMA碑文と『王朝年代記』の記述が整合していると判断することも難しい。

## 7. 17～18世紀のアンコール・ワット碑文に現れる アンコールとカムラテン

### (1) アンコールおよびアンコール・ワット

すでに見たように16世紀のアンコール・ワット碑文には、モハー・ノコー・エイントラプラシュ（エインタパット、アンコール王都）とプレア・ピスヌロック（アンコール・ワット）という語が現れる。1625年のIMA8も同様で、前者アンコー・エイントリプラーヌ *aṅgar indiprās* には、そのスレイ・アン・アエカアッカセーナーヨーティエピムク *sriy aṅg ekaaggase[na] yoddhābhimukkh*（偉大な軍隊の長）であるチャウ・ボニエ・ソーレーン・エイントリエティパティ *cau bañā Surend Indrādhpati* という人物がいたことが記される。また1632年のIMA16bには、エインティバット *indapatth*・モハー・ノコー・スレイ・ソートー *sṛisudhar*・バヴァー *pavar*・ピスヌロックが現れる。スレイ・ソートーの部分は、ヤショダラプラの名残かもしれない。そのほかエインタパットに類する語は、1636年のIMA22にプレア・ノコー・エイントリープラーヌ *indrīprās*, 1700年のIMA37にエインティバット・モハー・ノコーが現れ、日付なしのIMA36にはプレア・モハー・ノコーのみが現れる。

プレア・ピスヌロックという語は、1628年のIMA12にモハー・ノコーと「昔のカンボジア *kambūjja pūrāṇ* のバンティエイ・プレア・ピスヌロック」, 1632年のIMA17にプレア・ノコー・ヴァート *vāt* とプレア・ピスヌロックという組み合わせが現れる。IMA17では16世紀碑文と同じく、プレア・ピスヌロックに「モハー・クセートの神々、全能のモハー・プロームラシ、守護神や祖霊たちの群れの集まる場所」という表現がつく。1671年のIMA27にはプレア・アンコー・ヴァット *vatr*（アンコール・ワット）のみが現れ、『王朝年代記』『伝説部分』と共通する、「プレア・エイントリエティリエチ *indrādhirāj*」（インドラ神）が人間に対する手本として、プレア・ピスヌーカム *bīsasnoūvakarmm*（ヴィシシュヴァ

カルマン) に建てさせた」という説明がついている [北川2010: 196–197]。

## (2) カムラテン

繰り返しになるが、15世紀以降の碑文では、王名にヴラ・カムラテン・アンという称号は付されていない。『王朝年代記』にも、カムラテンという語は現れない。一方16世紀の碑文では、「ブレア・モハー・サラペチ・プット・カムラテン・イエーン・スダチ／サムダチ・バントゥール・ホーン」と、仏陀の後にカムラテンという語が付されている。同じ句は1632年の IMA17と1636年の IMA22に現れ、1663年の IMA26、1687年の IMA32でもそれぞれ仏陀と釈迦牟尼の後にカムラテンという語が付く。その他 IMA2では三宝の後、IMA17では仏足の後にも付けられている。さらに1631年の IMA15、1633年の IMA18と IMA19、1663年の IMA26、1700年の IMA37では僧伽の前に付される。また IMA15に「カムラテン・モックモントレイ mukkhamantri」、IMA17にカムラテンのみ、1638年の IMA21に「カムラテン・クラムカー kramkār」が現れ、いずれも官人たちを指す。王を指す事例では、IMA17と17世紀前半のワット・アトヴィエ Athvea 碑文 K261-5 [Pou1977] に、「下界のカムラテン」を意味する「カムラテン・プテイ・クラオム kamrrataen phdaiy krom」という語が現れる。すなわちカムラテンという語は、尊いものを称える言葉の一つとして、少なくとも17世紀までは碑文のなかに残存したということが分かる。

## お わ り に

『王朝年代記』や IMA にアンコールの諸王が現れないことは、史料の空白期をはさんで、歴史記録が継承されなかった可能性を示唆する。その一方で IMA3では、カンボジア各地のアンコール時代までの遺跡の建設者を「昔の王」、「王の祖先」と表現し、自身の王統はこれらが建造された時代まで遡るものであるという認識を示している。さらに IMA2, 3, 12や K82では、ピスヌロック（アンコール・ワット）とジャヤ

ヴィーラシャクティナガラ(ワット・ノコー)にも、「昔の」という修飾語が付されている。「壊れた」・「昔の」仏像や建造物を「修復」したという文言や、仏教の普及によって「昔の繁栄」や「平穩」を取り戻したいという祈願文からは、空白期に大きな破壊と混乱があったか、仏像や宗教的建造物が放置される期間があったこと、それがアンコール地域だけではなく、ロンヴェーク＝ウドン地域、おそらくメコン沿岸でも同様であったことを示唆する。同時に、「壊れた」仏像がどのようなものであったのか、いつ頃作られたものなのかという疑問も生じる。さらには、16世紀の碑文がいう「カンボジアの国」の広がりかどの辺りを想定しているのかも、探求されるべき疑問となる。

14世紀までの碑文で王名に付されていたカムラテンという称号は、15世紀以降の王名には付されなくなるが、仏陀など尊いものに関連する語として、17世紀までの碑文のなかに残存した。また16世紀碑文の王の称号中には、アンコールの諸王と共通するヴァルマンの語が含まれている。社会の上層部には、古典的な知識が伝承されたということであろうか。その一方で、14世紀までの碑文に見られたような土地や人員の寄進がなくなり、人々の名の前に付される語が変化していることは、やはり14世紀から16世紀のあいだに社会や経済の構造が大きく変容したことを示している。ただし空白期が2世紀に及ぶことを考えると、「シャムの侵攻」のような、急速な変化を想定する必要はないのではなかろうか。

#### 引用文献リスト

- Abdoul-Carime, Nasir & Mikaelian, Grégory. 2011. Angkor et l'Islam. Note sur la stèle arabe du Bhnām Phākhaeñ (K.1081). *Péninsule*. 63. pp. 5-59.
- Aymonier, Etienne. 1900. *Le Cambodge*. Vol. 1. Paris: Ernest Leroux.
- Coedès, George. 1913. La fondation de Phnom Pén au XVe siècle d'après la Chronique Cambodgienne. Etudes cambodgiennes. *BEFEO (Bulletin de*

- l'École française d'Extrême-Orient*). 13(6). pp. 1–36.
- Coedès, George. 1936. La plus ancienne inscription en Pāli du Cambodge. *Etudes cambodgiennes. BEFEO*. 36(1). pp. 1–21.
- Coedès, George. 1942. *Inscriptions du Cambodge*. Vol. 2. Paris: EFEO.
- Coedès, George. 1944. *Histoire ancienne des états hindouisés d'Extrême-Orient*. Hanoi. Imprimerie d'Extrême-Orient.
- Coedès, George. 1964. *Inscriptions du Cambodge*. Vol. 7. Paris: EFEO.
- Coedès, George. 1965. Documents epigraphiques provenant de Tenasserim. *Felicitations Volumes of Southeast-Asian studies: presented to H.H.Prince Dhaninivat Kromamun Bidyalabh Bridhiyakorn on the occasion of his eightieth birthday*. Bangkok. Siam Society. pp. 203–209.
- Filliozat, Jean. 1969. Une inscription Cambodge en Pali et en Khmer de 1566 (K82 Vatt Nagar). *Comptes Rendus de l'Académie des Inscriptions*. pp. 93–106.
- Finot, Louis. 1925. Inscriptions d'Angkor. *BEFEO*. 25 (3–4). pp. 289–409.
- Garnier, Francis. 1871–72. Chronique royale du Cambodge. *Journal Asiatique*. 18. pp. 336–385. & 20. pp. 249–289.
- Groslier, Bernard Philippe. 1958. *Angkor et le Cambodge au XVIe siècle d'après les sources portugaises et espagnoles*. Paris: Press universitaires de France.
- Leclère, Adhémar. 1914. *Histoire du Cambodge depuis le 1er siècle de notre ère d'après les inscriptions lapidaires, les annales chinoises et annamites et les documents européens des six derniers siècles*. Paris. Librairie Paul Geuthner.
- Lewitz, Saveros. 1970. Textes en kmer moyen. Inscriptions modernes d'Angkor 2 et 3. *BEFEO*. 57. pp. 99–126.
- Lewitz, Saveros. 1971. Inscriptions modernes d'Ankgor [*sic*] 4, 5, 6, et 7. *BEFEO*. 58. pp. 105–123.
- Lewitz, Saveros. 1972. Inscriptions modernes d'Angkor 1, 8, et 9. *BEFEO*.

59. pp. 101–121.
- Lewitz, Saveros. 1972. Inscriptions modernes d'Angkor 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16a, 16b, et 16c. *BEFEO*. 59. pp. 221–249.
- Lewitz, Saveros. 1973. Inscriptions modernes d'Angkor 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, et 25. *BEFEO*. 60. pp. 163–203.
- Lewitz, Saveros. 1973. Inscriptions modernes d'Angkor 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33. *BEFEO*. 60. pp. 205–242.
- Mak, Phoeun. 1995. *Histoire du Cambodge: de la fin du XVIe siècle au début du XVIIIe*. Paris: EFEO.
- Pou, Saveros. 1974. Inscriptions modernes d'Angkor 35, 36, 37, et 39. *BEFEO*. 61. pp. 301–337.
- Pou, Saveros. 1975. Inscriptions modernes d'Angkor 34 et 38. *BEFEO*. 62. pp. 283–353.
- Pou, Saveros. 1977. Inscriptions en khmer moyen de Vat Athvea (K.261) *BEFEO*. 64. pp. 151–166.
- Pou, Saveros. 1989. *Nouvelles inscriptions du Cambodge*. Vol. 1. Paris: EFEO.
- Pou, Saveros. 2001. *Nouvelles inscriptions du Cambodge*. Vol. 2, 3. Paris: EFEO.
- Pou, Saveros. 2011. *Nouvelles inscriptions du Cambodge*. Vol. 4. Paris: L'Harmattan.
- Preah Réach Pungssovdar* 『王朝年代記』 バンコク本（写本）.
- 石井米雄. 2020. 「港市国家アユタヤー」 飯島明子・小泉順子編『世界歴史大系 タイ史』 山川出版社, pp. 148–202.
- 北川香子. 2000. 「「水王」の系譜——スレイ・サントー王権史」『東南アジア研究』 38(1). pp. 50–73.
- 北川香子. 2003. 「カンボジア年代記」池端雪浦ほか編『岩波講座東南アジア史 別巻 東南アジア史研究案内』 岩波書店, pp. 129–132.
- 北川香子. 2010. 「ナーガとインドラ——カンボジア王朝年代記「伝説

部分」——」『南方文化』37. pp. 183–212.

トロエ, バレリー著. 佐野弘好訳. 2021. 『年輪で読む世界史 チンギス・ハーンの戦勝の秘密から失われた海賊の財宝, ローマ帝国の崩壊まで』築地書館.

新田栄治. 2021. 「16–17世紀薩摩・東南アジア諸国間交易と書簡」『南九州縄文通信』23. pp. 183–194.

深見純生. 2013. 「タイ湾における暹の登場と発展」『南方文化』40. pp. 71–91.

松浦史明. 2019. 「仏教王ジャヤヴァルマン7世治下のアンコール朝」千葉敏之編『歴史の転換期4 1187年 巨大信仰圏の出現』山川出版社, pp. 130–187.

松浦史明. 2022. 「アンコール朝の揺れ動く王権と対外関係」荒川正晴ほか編『岩波講座世界歴史04 南アジアと東南アジア ～15世紀』岩波書店, pp. 255–272.

リード, アンソニー著. 太田淳・長田紀之監訳. 2021. 『世界史のなかの東南アジア——歴史を変える交差点—— 上』名古屋大学出版会.

## 註

(1) 大半の碑文とバンコク本はサカ暦と干支で年代を記し、ガルニエ訳はそれに西暦を補足するが、本稿は紙数の関係上、特に表示されない場合は西暦に換算した年代を記する。

(2) ヤジュニャヴァラーハは10世紀のジャヤヴァルマン5世のグル guru (師) で、バンテアイ・スレイ別名イーシュヴァラプラの建立者である [Pou 2001: 169]。

(3) 例外として、小暦990年(西暦1628年)のブレア・ニピエン Preah Nipean 寺院(コムボン・スプー Kompog Speu 地方)碑文K75に高僧に対する水田の寄進 [Pou 1989: 33–35], 仏暦2293年(西暦1750年)のプノム・ベン博物館所蔵碑文K481(出所不明)に村名と、おそらくそこに設置された標界石 sīmā の



担当者の名 [Pou 1989: 47–50] が記されている。

- (4) セデスによると、テナセリムの「遺跡となった建造物」のなかで発見され、その翌年、1955年に、ビルマの考古局がセデスにその写真を送ってきた。
- (5) ワット・ラージャプーラナの金の板の刻文は、金と水晶の小仏像や、水晶の極小ストゥーパとともに、金の小ストゥーパの内部に巻いて納められていた。刻文はクメール文字で刻まれ、左側の余白に名があり、長辺に官人の名が書かれ、oy という語がそれに続いていた。セデスは「Kamrateñ Dharmā-bhinanda が、S'rīcandrabhānujayavarddha、占星学者の長に任じられた」という解釈を採用する。
- (6) 2人の人物のうち前者のリエムという語は人名ではない。ルクレールは前者を「王の兄」と訳し、後者を不明とする。
- (7) プノム・バケンでは、アラビア語碑文1点が見つかった [Abdoul-Carime & Mikaelian 2011]。

[付記] 本研究は『出土陶磁器と交易関連文書に基づく前近代日本＝カンボジア間交易・交流史の復元研究』[文部科学省科研費21H00601] (研究代表者 田畑幸嗣) による。

(学習院女子大学・教授)

system by the Qing dynasty was severed only when the Republic of China made it into a park after the promulgation of the “Revision to the Conditions of Special Treatment of the Qing Royal Family.” After the establishment of Manchukuo, the management system by the Government Administration Office, Imperial Household Office, and related organizations under the direct control of Puyi, namely the Qing Imperial Household, was restored. Preservation of the Qing dynasty property has a history of being linked to efforts to restore the Qing dynasty. Nevertheless, in Manchukuo, which had Puyi as its head of state but denied the restoration of the Qing dynasty, not only was the administration system on the Qing Imperial Household side restored, but Puyi’s intentions were also reflected in various aspects such as the establishment of the management organization, personnel affairs, and repair budgets. In this way, the reality of Manchukuo was evident in the fact that the political heritage of the late Qing dynasty, which was deeply related to the restoration of the Qing dynasty, could not be eliminated.

The process of appointing Chen Zengshou 陳曾壽, who played a central role in the management organization since the early days of Manchukuo, revealed that Puyi, who appointed him, was the main figure in the preservation of the mausoleums. Puyi’s intention in preserving the three Shengjing mausoleums was to appear as the “Great Qing Emperor” by reviving the mausoleums as the “private property” of the former Qing Imperial Household and reviving visit to the mausoleum.

Between the Angkor and Post-Angkor Periods: Identifying the Gap  
between Inscriptions and Chronicles

KITAGAWA Takako

There is a blank period of contemporary historical materials between the Angkor and the post-Angkor periods. The well-known history of this peri-

od, from the 14th century to the 16th century, had been edited from the Dynasty Chronicles compiled after the end of the 18th century, inscriptions of the early 14th century and the late 16th century, and Portuguese or Spanish records. The parts not described in those texts have been filled with imagination. In this paper, we reexamine the inscriptions from the 14th to the 17th century and the earlier versions of the Dynasty Chronicles, to ascertain which data were cast aside, which story was derived from guesses when constructing the accepted Cambodian history, and to identify what is definitely written in the above historical materials.

The results. 1) The fact that the Angkor Kings do not appear in the Dynasty Chronicles or modern inscriptions suggests the possibility that historical records were not inherited through the blank period. 2) In the late 16th-century inscriptions, the Angkorian sites are given the qualifier “of old Cambodia.” In addition, the King’s inscription refers to the builders of those foundations as “the ancestors of the King,” indicating a recognition that his own royalty was to be traced back to that era. The statements that many “old” statues and buildings were “restored” and that recovering “the old prosperity” through the spread of Buddhism was desirable suggest that there might have been major destruction and confusion, or there might have been a time when Buddhist statues were left unattended. 3) In modern inscriptions, the title of *kamraten* was not attached to the King’s name but put after the words symbolizing Buddhism. Moreover, a 16th-century inscription contains the word *varman* in the King’s name. These suggest the possibility that classical knowledge had been handed down to the society’s upper class. 4) The lack of donations of lands and personnel, which were seen in inscriptions up to the 14th century, and the fact that the words prefixed to people’s names to indicate their sex and social status had changed before the 16th century, suggest the structure of society and the economy transformed during the interim period. However, as the gap period lasts as long as two centuries, rapid changes should not necessarily be assumed.